

編 集 後 記

今回の本誌の発行は、まさに未曾有の困難に見舞われた。会の予算の大幅カットに加え、資源価格のかつて無いほどの上昇。このままでは本誌の発刊はおろか、学会の存続さえ危ぶまれる事態に直面した。しかし「最悪の事態は減多に起こらない」、まさにこの言葉のとおり、当初想定された事態は無事に回避されたばかりか、次年度の活動は今年度と比較して余裕を持った会の運営ができそうである。いずれにしても、関係各位と無事、例年とおりに本誌が発刊できたことをまずは喜びたい。

この1年を振り返ると、「災害」や「変化」の1年だった。年度当初からのガソリンを始めとする資源価格の急騰、秋口からは「百年に一度」と言われる全世界的な景気後退、一転した株価の急落に加え、急激なドル安、そして円高。「災害は忘れた頃にやってくる」、中国四川省の地震で約8万人、ミャンマーのサイクロンでは14万人、合計22万人の命が自然災害によって失われたと推定されている。アメリカでは初の黒人大統領が誕生した。

国内的には、セイフティーネットの整備を忘れた経済の自由化がもたらした歪み。年未来の「年越派遣村」の報道を複雑な思いで見ると、いつの間にか派遣労働は全く身近なものになっていた。今日のような事態の発生は予見されていたにもかかわらず、具体的な対策はほとんどなされていなかった。ますますグローバル化する社会の中で、働き方について新しい展望を早急に見いだす必要があることは言うまでもない。

このような中、個人的には新年早々に旧門前町道下（とうげ）地区等の住民調査の機会を得た。いわゆる「限界集落」の典型、かつ、一昨年の能登半島地震で甚大な被害を受けたにも関わらず住民は明るい。また、今回調査に回ったほとんどの地域で65歳はまだ「若者」である。このような地域に住むこと自体が究極の「アンチエイジング」と言える。さらに、地域興しを進めている関係者の「地震がこれまでの埃を払い、地域の歯車が動き出した」の言葉にも驚かされる。周囲が暗ければ暗いほど、小さく点のような光であっても我々はそれを「明るい」と感じるができるようだ。

2009年1月27日 大雪の日に 沢野伸浩